

周作人文学の滑稽趣味について

呉, 紅華
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/9664>

出版情報：中国文学論集. 25, pp.107-124, 1996-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

周作人文学の滑稽趣味について

呉 紅 華

始めに

中国の現代文学研究は長い間魯迅の『呐喊』文学を中心に行なわれてきた。その結果、研究の高度な進展は見られたが、一方、その偏った研究によって、多くの考慮すべき重要な研究課題が看過され、結果として現代文学全般の把握が十分にできなかつたように思う。近年来多くの学者がそのことに気付き、今までの研究の重心を移して、これまでずっと否定されてきた作家達（陳独秀、周作人、林語堂）の研究に関心を寄せつつある。特に多くの知識人層を魅了した二、三十年代の小品文運動、「幽默」（ユーモア）ブーム、明清俗文学への回帰などの傾向に対する最近の関心の高さはまさにその移動修正の表われである。

当時のそのような文壇の潮流に理念の基本的枠組みを提供し、終始その先頭に立ってリーダー的役割を果たしたのは周作人と言っても過言ではない。しかし「幽默」ブームに関する研究論文を調べてみれば、林語堂、魯迅との関係を論ずる論文は多く見受けられるが、周作人とその「幽默」（または彼の滑稽趣味）についてはほとんど誰も注意を払っていないと言うことが分る。けれども周作人の文章を読めばすぐ分るように、彼の作品には「滑稽文学」に言及した部分が多く見られ、滑稽趣味の作品もたくさん書かれている。彼のこの滑稽趣味は間違いなく周作人文学の大きな特徴の一つである。本稿はこの周作人の、川柳、落語、狂言などの日本江戸滑稽文学への関心、中国の明清時代や西欧ギリシアの滑稽文学の紹介、彼の文学の中の滑稽趣味、更には周作人の滑稽趣味の本質と「幽默」

周作人文学の滑稽趣味について（呉）

ブームとの関係を明らかにしたいと思う。

一

周作人の滑稽趣味を論ずる前に、まず滑稽と幽默の由来と区別を簡単に説明したい。滑稽とは中国のいわば「土着民」で、古くは司馬遷の『史記・滑稽列傳』にその用例を見ることができ、

淳于髡者、齊之贅婿也。長不滿七尺、滑稽多辯、未嘗屈辱。

〔滑稽列傳〕第六十六 『史記』

以上の用例を見て分るように、滑稽の本来の意味は、知力に富み、弁舌さわやかな人が、巧みに是非を混同して説くことで、後に転じて「言語が滑らかで、智計が頓に出ること」の意味となる。いまはほとんど「人を笑わせる可笑しいことば、動作、事態」として使われている。

中国の古い滑稽作品と言えば、摠苗助長、守株待兔、南猿北轍などの笑話話が挙げられる。これらの笑話話は人を笑わせると同時に、ある道理を隠して説明する寓言のようなものである。これを聞いた人々は笑って喜ぶだけでなく、その中から教訓も得ることができる。この類の滑稽作品は中国の古い滑稽作品に多かった。しかしその後このような笑話話は、中国の封建士大夫たちに「上流の席に出せない」卑俗的なものと見做され、無視された。

ずっと後の明の中葉になって、王陽明学と禪宗が勢力を得て思想解放が文壇にまで影響した。その影響により、中国の俗文学が次第に成長、発展して、俗文学の内容である笑話、民謡などの滑稽文学作品もまた注意されるようになった。特に明の末期、馮夢龍の『笑府』十三卷、李卓吾の『開卷一笑』、そのほか『笑林』、『笑贊』、『笑倒』、『笑林広記』などの笑話集が次々と世の中に出されて、滑稽文学に於いて空前の発展を見せた。

これらの中国歴来の滑稽作品をよく分析してみると、中国の滑稽作品がほとんど民間に言い伝えられて、聞き慣れた笑話で、滑稽小説のような文学作品がまだあまりなかったことが分る。これらの民間に言い伝えられ、且つ文人の芸術加工の無かった笑話はほとんど客観的な目で日常生活の中の可笑しいことを発見してみんなを喜ばせる話である。例えば、『笑府』の中に次のような笑話がある。

ある男が妻に殴られて、やむを得ずベットの下に身を隠した。妻が「早く出なさい」と叫ぶと、この男は「大丈夫たる者、出ないと云ったら、絶対出ない」と答えた。また、

あるコックさんが自分の家で肉を切っていた。ほかの人の目を盗んで自分の袋にすこし隠した。妻がこれを見て罵った。「これは自分の家の肉ですよ。なぜこのようにするの？」コックさんは「あれ、僕、忘れていた。」と答えた。

この二つの笑話は当時の中国庶民の日常生活の極く普通の出来事だが、客観的に見てとても可笑しいことである。つまり話し手と聞き手は大丈夫たる者の妻の前の醜態と他人の肉を盗むことを暴露したことを笑って楽しんでるのである。中国的笑話の中には、このような人を楽しませる悪賢いもの、軽薄、猥褻、嘲笑、諷刺の話がほとんどである。

「幽默」は「土着民」滑稽に対して外国から来た「洋挿隊」である。一九二四年五月三十日の『晨报副刊』で、林語堂は英語の「Humour」を中国の滑稽の意味と区別して、中国語の「幽默」と訳した。英語のHumourという言葉はラテン語から来たもので、本来液体とか湿気の意味であり、後になって特殊な気分、すなわち好い気分、よい機嫌となった。Humourはイギリスの貴族社会の間にまず流行したもので、人を傷つけない上品な可笑しみや洒落、知的ウィットを指し、意志的諷刺に対して感情的なものである。日本人は「有情滑稽」と訳している。Humourの解釈にここで林語堂が一九七〇年ソウルで行なわれた第三十七回国際筆会で講演した『東西文化の幽默を論ずる』に使った例を挙げよう。

諸君は恐らくソクラテスにとても凶暴で我儘な妻がいることを知っていますでしょう。ソクラテスは奥さんに一連の罵声を浴びせられる毎に部屋を出て静かなところを探しに出かけます。しかし彼が門を出たとたん、彼の妻は桶一杯の冷たい水を窓から彼に浴びせかけ、それで彼は全身びしょぬれになってしまいました。しかし彼はおこらずに「雷の後は必ず大雨が降ってくる」とつぶやいて、泰然としてアデス市場のほうへ向かいました。

「蘇格拉底潑辣的妻子」『林語堂論中西文化』

「雷の後は必ず雨が降ってくる」という知的な言葉で、妻との正面衝突を避けた。これは前に述べた中国の夫婦

喧嘩の笑話とやや性質が違う。前の中国の笑い話は「大丈夫たる者」に拘る男が妻の前ではベッドの下に潜るほかならない醜い姿を見て喜んでゐる。ここでのソクラテスの話を聞いた人はソクラテスを笑うことができなく、かえつて偉大な人物にこのような妻がいることをかわいそうに思うと同時にこのような私生活の不幸を軽妙に見做して、知恵を使って夫婦喧嘩を抑え、大事な事業に全力を捧げるソクラテスの偉大さをあらためて感じる。これが中国の滑稽と西洋の幽默の違うところである。

理論的に解釈すれば、滑稽は他人の言動の中から、無知、非常識、不合理、見当違いを発見することを喜びとする。これに対してHumourは、人の無知や見当違いの動作を笑うというような性質のものではなく、一種の感じ方であり、情意の主観的な見方ともいふ。諷刺のように揶揄的にまた侮辱的に対象を見るのではなく、好意を以て対象に入り込んで、人生の矛盾や世上の卑俗なものを見て笑いながらも、結局人生の意義と祝福を認めている。いわば人を救うようなものである。このHumourを「西洋的滑稽」と言うこともできよう。

先も既に述べたように、明末の中国の文壇では笑話のような滑稽作品が非常に流行していた。そのまま発展していけば、中国の滑稽文学が日本、西洋より遅れることはなかっただろうが、しかし明末以後桐城派と八股文（所謂載道派の文学）が中国の文壇を支配し、滑稽作品はまた軽視され、後はぶつくりと姿を消した。それとは反対に日本では江戸滑稽文学が中国明清の滑稽文学の影響を受けて高度な発展を見せていた。その日本の江戸滑稽文学は、ヨーロッパ文化の洗礼を受けることもなく、独自の風格を持つ作品も現われた。その独特の風格の作品は中国の明清にあまり見られなかった、意志的諷刺とは反対に、ちようどいい程度に人の痒いところに手が届くといったもの、悲哀な可笑しみ、無邪気的なもの、純化された悟性的な作品などである。

着がへずに芝居帰りの夜をふかし

(柳多留・五)

母の名は親仁の腕にしなびて居

(柳多留・二)

男の子ははだかにするとかまらず

(柳多留・三)

初しぐれ猿も小蓑をほしげ也

松尾芭蕉

以上の作品は中国明清の滑稽文学作品より一歩進んだ日本の滑稽文学の作品である。こういう中国に余り無かつ

た、独特な風格を持つ日本の滑稽文学作品に注目した人達がいた。清朝の駐日大使黄遵憲（一八四八—一九〇五）は『日本雜事詩』に日本の落語などを紹介したりした。また日本に留学した上海の徐卓呆（半梅）も、帰国後上海で滑稽小説、滑稽劇の脚本を書いて、特に上海の滑稽戯——「獨脚戯」の形成と発展に重要な役割を果たした。そして民国初期上海の雑誌『申報』、『品報』などに滑稽の作品が多く見られたのも日本留学から帰った春柳社のメンバーの働きや、日本の滑稽文学からの示唆が多いと思われるが、まだ幼稚で中国明清の本来の滑稽に拘るところが多かったように思う。

中国の滑稽作品にしても、日本の滑稽作品にしても、ここでは一括して「東洋的滑稽」と言える。その特徴は社会の下層にある平民の卑近低俗の生活から生まれた文学であり、西洋の幽默と比べて、悪賢いもの、輕薄、猥褻、嘲笑、諷刺などの作品が多く占められている。それは中国と日本の滑稽文学が同じ封建專制下の東洋文化の背景から生まれた庶民文芸で、まだきびしい君臣関係、上下関係から解放されていないからである。

広義的で言えば、Humourと滑稽はお互いに重なった部分が多く、つまりヨーロッパのHumour文学の中にも滑稽の内容があり、東洋の滑稽文学にもまたHumour的作品が見られる。けれども生まれる社会背景と話す人の階層が違うので、滑稽の内容に対する捉え方もかなり違ってくる。ここで一一比べて分析はできないが、すくなくとも西洋には貴族の知性的好意的な幽默作品が多く、中国には嘲笑的で、卑俗ばい庶民の滑稽作品が多いと言える。林語堂の幽默提唱はこの中国の滑稽文学の不足部分を西洋文学から取り入れようとしたものであった。周作人も中国の滑稽文学が日本より遅れていたことに気づき、同じ目的で日本の滑稽文学に目を向けたものと考えられる。

二

以上、滑稽と幽默の区別について簡単に述べてきたが、次に周作人の滑稽趣味について考えてみたい。周作人の滑稽趣味の発端は彼の日本留学時代に遡ることができる。周作人は一九〇六年から一九一一年まで日本の東京に留学した。彼の生活した東京は江戸庶民文芸の発源地であり、川柳、落語、狂言、滑稽本などの庶民的滑稽文学が非

周作人文芸の滑稽趣味について（呉）

常に発展していた。これらの文芸は周作人文学とは切っても切れない関係にある。

周作人は日本に来た当初兄の魯迅と一緒に東京に住んでいたもので、対外交渉は全部魯迅がしてくれた。しかし、暫くして魯迅が杭州に行つて教鞭を取ることにになり、私自身もその時結婚したので、その後の家庭社会のことはみんな自分自身で處理しなければならなくなつた。これが私を勉強する氣にさせた。でも、習つたのは本の中の日本語ではなく、實際社会に流通している言語である。理屈から言えば現代小説と戯曲を選んだほうが一番いいが、その範圍がとても広いから、どこから入門したほうがいいか分らないので、ただふざけものだけを讀むことにした。それは文學の上ではすなわち狂言と滑稽本である。韻文方面には川柳のような一種の短詩がある。…そのほかまた一種の笑話があり、落語と呼ばれる。

そして彼は当時富山房書房で出版された『狂言二十番』、『落語選』、『俳風柳樽』などを日本語勉強の教科書として読んでいった。このことから分るように、周作人は日本で留学した五年間、多くの日本の滑稽文学作品に目を通したのである。

一九一一年周作人は日本から帰国して、まもなく北京大学の東方文学学部の日本文学教授となり、主に江戸小説の講義をした。それはちょうど留学期に興味を感じ、読んだ日本の滑稽文学と同じ時代の文学で、また同じ庶民文学でもあつた。そして以後彼は更に本格的にそれらの江戸庶民文学を主とした日本文学の紹介と研究に心血を注ぐことになる。周作人は「日本之再認識」と言う文章の中で、一九一七年以来北京で活動した二十年間、特に川柳、狂歌、小唄、俗曲、洒落本、滑稽本、小話すなわち落語などを読んでいたと述べている。これらはほとんど日本の滑稽文学である。また彼の日本文学関連の論文の中で、滑稽文学についての代表的な論文に「日本の小詩（俳句）」、「日本の諷刺詩（川柳）」、「日本の落語」などがある。日本江戸の庶民滑稽文学に尋常でない関心を寄せていたことが窺える。周作人はまた日本の有名な滑稽本——『浮世風呂』、『浮世床』や、『日本狂言選』を中国語に翻訳した。更に十返舎一九の書いた『東海道中膝栗毛』と『落語選』を翻訳しようとしたが、これは結局実現せず、とても残念に思つていたという。そして周作人自身が彼の日本文学の吸収の仕方について晩年の回想録に以下のやうに纏めている。

正統でない滑稽諷刺的なものが好きで、真面目な大作にはかえって興味が無い。したがって、日本の『古事記』は有名だが、私は『狂言』選とあの『浮世風呂』と『浮世床』の方がもっと素晴らしいものだと思う。ギリシアのエウリピデス (Euripides) の悲劇を十数種翻訳したが、しかし私の興味はかえって後世の雑文作家の方にあり、ルキアノス (Loukianos) の『神々の對話』は私を四十年も惑わせることになった。

「八十心情——放翁適興詩」『知堂集外文』

以上の資料を読むと、周作人の滑稽文学への傾倒は最初は日本留学中に会った江戸の滑稽文芸から始まったものであることが分る。その後彼は比較文学の方向から中国の明清の滑稽作品、西欧ギリシアの滑稽喜劇などへと興味の対象を広げていったのである。

三

さて周作人が日本留学中からすでに育てていたその滑稽趣味はその後彼の文学活動の中にどのように表わされているのだろうか。次はこのことについて検討してみる。

一九二四年五月三十日、林語堂は『晨报副刊』に、「徵譯散文並提倡『幽默』」と言う文章を書いて、英語の Humour を「幽默」と訳すことを主張した。しかし林語堂のこの主張はいわば「醜い家鴨の子」であり、当時の文壇に理解されることなく無視された形となった（幽默ブームはこれよりずっと後の一九三二年林語堂の主編雑誌『論語』に於いて、林が再びこの説を提唱してからやっと流行り出したのである）。一方、同じ一九二四年『晨报副刊』に周作人も「徐文長故事」（笑話集）を載せた。その結果、酷いことに編集長孫伏園が掲載の責任を問われて首になったのである。このように「滑稽」を全く理解していなかった当時の中国の文壇に於いて周作人達の試みは余りにも性急すぎたと言えよう（滑稽ですら未だ理解されていなかったときに西洋の「幽默」は当然誰も目を向けない）。しかしそれで挫けることなく、周作人はその後も滑稽を提唱し続けていた。それは彼の『語絲』の編集態度からも見てとることができる。孫伏園が『晨报副刊』の編集長をやめさせられたことにより、一九二四年十一

周作人文学の滑稽趣味について（呉）

月十七日、周作人らは自分達の雑誌『語絲』を刊行した。目的は自由に話すことの出来る場所をつくることである。一九二五年一月五日、『語絲』第八期に周作人は読者伯亮と言う人宛ての返事の手紙を載せた。彼はその中で『語絲』に多くの滑稽趣味があることを認め、次の様に言っている。

私は滑稽がいくら多くても、何の妨げにもならないと思います。言う人と聞く人がいれればいいのです。ただあまり「滑稽のための滑稽」を表現できていないように思います。そこで言われているのはだいたい「厳正のための滑稽」なのです。これは私にとってあまり満足できないところです。 「滑稽似不多」『語絲』

ここでの厳正というのは何かを厳しく批判し、自分の正しさを強調することであり、「滑稽の為の滑稽」は有情滑稽のことであって、諷刺を目的とせず人間生活の可笑味を感情的に描くことである。ここから分るように周作人の滑稽に対する理解はすでに笑話等のような未熟な滑稽に止まらず、且つ諷刺批判でもない滑稽へと広がり始めていたのである。

そのほか周作人の滑稽趣味はまた彼の中日両滑稽文学の比較研究からも十分に窺える。一九三六年七月五日、梁実秋宛てに書いた「日本の文化書を談ずる」(一)に

江戸時代の平民文学はちょうど明清の俗文学に相當する。私達は自らの威風を滅ぼす必要はないように思われ
たが、しかし私は日本の「滑稽本」を読んだ時、中國にこのようなものがないと認めずにはいられなかった。

： 「談日本文化書」(『周作人全集』四)

と周作人は日本の滑稽作品と比較し、中国の滑稽文学の未熟さを指摘している。それと同時に彼は中国の滑稽文学の中から少しでもいいと思われた作品を中国の読者に紹介している。『儒林外史』はその例であり、周作人はこの作品を人情世故を傍観的に描いて、未熟ながらも中国の滑稽作品中唯一の成績だと評価して、明らかに中国のそれまでの滑稽作品と區別して扱っている。また中国の戯曲の中からも戯け役の「副淨」を取り上げて、滑稽芸術の精華だと解釈している。その後彼は『苦茶庵笑話集』、『明清笑話四種』を編集出版し、また、明清の滑稽作品を書いた作家を紹介したりもした。そして彼はギリシア文学を紹介し翻訳する上でも滑稽作品を紹介し、四十年もかかってルキアノスの『神々の対話』を研究翻訳した。

以上の資料を見れば、周作人の滑稽趣味は日本の滑稽文学への単なる趣味に止まらず、彼の文学活動の中で様々な形で取り入れられていることが分った。そして滑稽文学を紹介、比較、研究しているうちに、次第に中国、日本の滑稽作品の中の優れた点に気付くことになる。一方彼の書いた作品もこの種の滑稽に満ちており、無邪氣的な、悟性的な滑稽、つまりHumourの性質に近いようなものを表現しようとしたのである。このことについては次の段落で彼の滑稽の本質と一緒に分析することにしよう。

四

周作人の滑稽趣味は、周作人全集中の作品の至るところにみとめられるが、特に彼の小品文、雑詩、戯れ歌に集中的に表わされていると言える。

彼の滑稽趣味は「厳正のための滑稽」と「滑稽のための滑稽」に分けることができる。まず彼の小品文の中の「厳正の爲の滑稽」の作品を見てみよう。

最も私を不愉快にさせたのは難民婦人の足だった。彼女達の足はもともとこうであって、難に遭遇してから、縛ったのではなく、或いは難から逃れるために特に走って尖ったようになったわけでもない。しかし、これは實に怖いほど尖っている。わたしは以前にも確かに神秘的な小足を見たことがあるが、それはほとんど「足がどこにあるのだろう」と疑うほど小さい足である。見るたびに、私は自分が結局野蛮民族なのだと感じ、「私は女の生まれながらの足がもつともすきだ」という歎息をさせずにはいられない。今この足が難民の体にくっついているのを見るとますます無然となる。私は難民がこのような小足を持っているのが相應しくないとやっているわけではなく、ただどういふわけかこの小足と難民との玄妙なる関係を感じとっていたのである。小足は難民だからこそだと言えるかも知れない。

「閑話四則」四（『周作人全集』一）

この文章は根底では中国の「纏足」のことを諷刺しているわけだが、しかし周作人は難民と纏足という二つの素材を一つの話にうまく纏め、読者にその関係に一種の不調和感（つまり纏足は貴族のお嬢さんのものはずだが、

周作人文学の滑稽趣味について（呉）

ここでは難民の足になる)を感じさせるため、結果として読者は滑稽に思うと同時に哀れにも感じることになる。その淡々とした哀れさの中には「纏足」に対する強い非難も含まれている。

『澤瀉集』の中に「喫烈士」と言う文章があって、それはこの事(筆者註：五卅事件、烈士被殺、自己受害、還向別國辯証之事)を諷刺しているのだが、真正面から言えないから、ただ冗談を言うように見せている、そのことが重大なのである。——私は同じようなことであつた時、往々にしてただ冗談を言うしかなかった。以前書いた「碰傷」、「前門遇馬隊記」は則ちみなこの類の例である。 「二四八、五卅」 『苦茶』

「喫烈士」、「碰傷」、「前門遇馬隊記」などの作品は、周作人自身も認めているようにみなある事を諷刺しているが、彼はこれらの作品において、真正面からの批判ではなく、冗談を言うような手法を用いたのである。このような文章は魯迅の作品にもよく見られる。「阿Q正伝」の阿Qがまさにこの類の滑稽を表現していると言えよう。これらの作品は読者に実に強烈な印象を与え、封建文化によって生み出された中国の醜い部分を鋭く衝いていると言えるだろう。しかし、同じ批判の文章であっても、魯迅のほうは火薬味が濃くて、周作人のは比較的平淡なのである。これは表現手法上の違いで、目的は同じである。

しかしそういう鋭い社会批判の文章とは対照的に、周作人はまた「滑稽の爲の滑稽」の作品も多く書いている。これらの文章の中には前の諷刺作品よりもっと鑑賞に堪える魅力的な作品もある。林語堂はこの周作人の滑稽趣味について次のように言っている。

もし魯迅に笑話を話させたら、それは中國本来の慣例であり、もし立派な北京大學の教授周先生に社会のため
に優雅な冗談を言ってもらったら、それこそは西洋の「幽默」風格にふさわしいものである。

〔徵譯散文并提倡「幽默」〕『林語堂論中西文化』

林語堂は魯迅の笑話を中国本来にあるもの(諷刺的滑稽)とし、周作人の冗談を西洋的ユーモアだと見ているのである。林語堂の言葉をもっと具体的に説明すると、つまり魯迅は諷刺的滑稽であり、周作人は有情的滑稽だと言っている。周作人の滑稽がすでに外国の影響を受けていることは林語堂のことばでも分るが、さて周作人の有情滑稽とは一体どのような滑稽だろう。私は次の作品が周作人が言った「滑稽の爲の滑稽」だと思う。

十、書房

書房小鬼忒頑皮
掃帚拖來當馬騎
額角撞牆梅子大
揮鞭依舊笑嘻嘻

十一、書房二

帶得茶壺上學堂
生書未熟水精光
後園往復無停止
底事今朝小使長

三、趙伯公

小孩淘氣平常有
唯獨趙家最出奇
祖父肚臍種李子
幾乎急殺老頭兒

二、花紙

老鼠今朝也做親
燈籠火把鬧盈門
新娘照例紅衣袴
翹起胡鬚十許根

周作人文学の滑稽趣味について（吳）

書房のちびっこは余りにもいたずらで、
帚を馬にしてまたがって、

壁にぶつかり額にたんこぶが梅の実ぐらいに腫れても、
やっぱり鞭を振るって相変わらずにこにこしている。

急須を持って学校に行く。教えてもらったばかりの文章は

まだ暗誦しおわらないのに、急須の水はもうなくなっている。

後園に行ったり来たりするのは休む間もない。

いったい今日のおしっこはどうしてこんなに多いのか。

「兒童雜事詩・甲編兒童生活詩」（『周作人全集』五）

子供のいたずらは普通のことだが、

ただ趙家の子のそれはもつとも奇抜である。

祖父のへそに李の種を植えて、

祖父を死にそうになるほど驚かせた。

「兒童雜事詩・乙編兒童故事詩」（『周作人全集』五）

ねずみも今朝結婚式を行なう。

提灯、松明をもって門を賑わせて、

花嫁は例によりあかいうわぎとズボンを着て、

口には何十本かのひげをピンとたてている。

「児童雜事詩・丙編兒童生活詩補」（『周作人全集』五）

以上は周作人の児童雜事詩から引いた詩だが、これらの作品を読めば私達は思わずその無邪氣さに笑ってしまうだろう。これこそが無邪氣な笑い、周作人的有情滑稽で、そこには諷刺などは少しも含まれていない。むしろ子供の素直さに着眼して、それを面白く暖かく描いている。また次の文章も同じだが、

黄花麦果刳結¹⁶、

黄花麦果¹⁶ががりがり堅そうで、

關得大門自要喫：

門を締めて一人で食べよう。

半塊拿弗出，一塊自要喫。 半分でも出したくない。全部一人で食べたい。

「故郷の野菜」（『周作人全集』二）

これは子供のエゴイズムとけちを余すこと無く暴露している。しかし子供をせめてはおらず、エゴイズムとけちを借りて、食べ物¹⁷の美味しさを表現したものである。周作人はこの童謠が非常に気に入っていたようで、何回も自分の文章に引用していた。ここに表われたのも当然無邪氣な笑いで、有情的な滑稽と読めるだろう。

また周作人のほかの文章にも有情的滑稽が多く挙げられる。一九二九年、北京大学に日本語の四年コースが回復されたことについて、周作人は

教員の割り当てがたりなくなつた。そこで無理矢理人を引っ張つてきて手伝つてもらふことにした。錢稻孫に『万葉集』の和歌を担当してもらつて、傅仲涛に近松の淨瑠璃戯曲を担当してもらい、徐耀辰には現代文學の部分、そして私は江戸時代の小説を担当した。…俗語言う、「黄胖春年糕，吃力不討好」とはまさにとてもふさわしい評語である。〔二五二、東方文学系〕（『周作人散文』四）

と述べる。これは周作人が北京大学で日本文学の講義を引き受けたことに対する自分の心情を譬えている。「黄胖春年糕，吃力不討好」というのは実に面白い言い方である。黄胖とは浮腫病つまり体のむくむ病氣だが、それにかかった人は顔などが腫れていて、大きく力がありそうに見えるが、実は全身無力でとても苦しい病氣なのである。それが力の要るもちつきなどをさせられると、本人はとても苦しくついているのだが、それを見ている人にはとても滑稽に感じられる。しかも本人は力を尽くしても、その結果はうまくいかないから結局文句を言われることにな

るのである。

ここで使われている滑稽手法も、なにかを諷刺するものではなく、周作人は自分のことを譬えることよってむしろその病気を抱えた人への共感すら感じているように思わせるのである。この文章は民間の俗語をうまく引用して、当時彼が日本文学の授業を引き受けた気持ちの的確に伝えていると思う。

次は周作人の「苦茶庵打油詩」から引く戯れ歌だが、

其五

禪林溜下無情思

禪宗の寺から抜け出し、何をする気にもなれない。

正是沉陰欲雪天

天気はまさにどんよりとして、今にも雪が降り出しそらだ。

買得一条油炸鬼

油揚げを一本買ってきたが、

惜無白粥下微塩

惜しいことだ、塩を少々入れてそれと一緒に食べるお粥がないとは

其二十

一住金陵逾十日

金陵に泊まっていたら、すぐに十日がすぎた。

笑談哺啜破工夫

友人との談笑や飲み食いに時間がかかったのだ

疲車羸馬招搖過

ぼろ車に瘦せ馬でゆうゆうと町をよぎる。

爲吃干絲到後湖

南京郊外の後湖へ「干絲」（干し豆腐の細かく切ったもの）を食べに行くために。

「苦茶庵打油詩」（『周作人全集』四）

これらの詩は中国歴來の悪賢いもの、輕薄、猥褻、嘲笑、諷刺のような滑稽作品と違って、平淡の言葉に滑稽味を入れて、稚拙のように見えるが、実は作者の深い感情を蔵している。一首目は淡淡とした哀愁の中に一種のやむを得ない可笑しみが漂っている。二首目の詩は「疲車羸馬」（貧乏秀才の譬え）で南京郊外の後湖まで名物の「干絲」を食べるために行く作者の面白い姿を描いているが、一首目とは反対に一種の暖かい可笑しみが感じられる。これこそが周作人の「滑稽の爲の滑稽」の作品である。

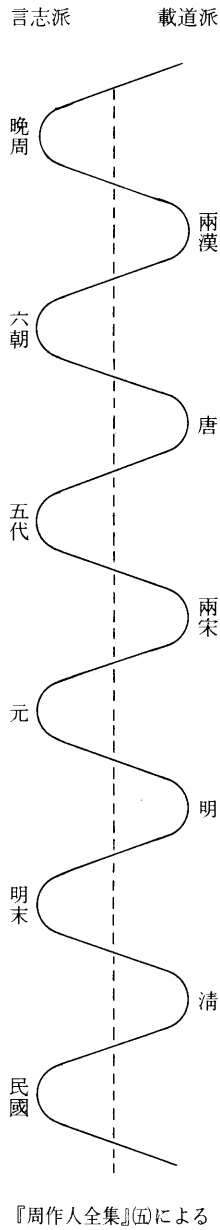
周作人の滑稽作品は大体以上のように二種類に分けることができる。そして周作人自身は「滑稽の爲の滑稽」が

周作人文学の滑稽趣味について（吳）

中国の文壇ではあまり十分に取り上げられていないことを不満に思っている。この不満は日本滑稽作品の豊かさとの比較から来たものである。不満があったがゆえに彼は中国の古典の中からも、日本、西洋の滑稽文学からも一生懸命に滑稽作品を発掘し、中国に於ける滑稽作品の不足を補おうとしたのである。彼はまた一方で自分自身の作品にも滑稽味を取り入れて独特な風格を持った作品を作った。以上見てきた「児童雜事詩」、「苦茶庵打油詩」、多くの小品文などは彼のこの滑稽趣味の試作である。

また周作人は滑稽文学作品の表現だけでなく、もっと深い視点から、中国滑稽文学の発達が遅れた理由についても分析して、それは道学と八股が中国の人心を縛っていたからであると解釈している。道学と八股文は両方とも「載道派」の文学である。周作人は、中国の滑稽文学がヨーロッパ、日本に遅れたのはそういう束縛があったからであると思っていた。

一九三二年、周作人は「中国新文学の源流」に中国文学の変遷歴史を螺旋状に描き出した。



そして文学が「載道派」に握られると、どうしてもその発展が阻まれる。中国の新文学に政治思想に束縛されない「言志」の文学を呼びかけ、「載道」に軽視された民間の俗文学の研究が必要だと指摘したのである。そういった文学理論に基づいて、周作人は猥褻な民謡を集めたり、明清の笑話集を編集したりして、民間の趣味思想を理解するための明清の俗文学の研究に力を入れたのである。というのは滑稽文学は単なる俗文学の一部分にすぎず、周作人の滑稽の提唱は、実はもっと広い中国明清の俗文学の研究に目が向けられているからである。中国の新文学の流

れを見て分るように、中国の新文学の多くは明清の俗文学を出発点として、中国の古典からも、西洋からも、また日本からも栄養を摂取して発展してきたのである。当然「幽默」ブームも日本からの影響を見逃すことができない。周作人のこのような理論と実際両面の努力によって、当時の文壇も次第に滑稽の作品を取り入れるようになった。このような状況の下で、一九三二年林語堂は彼の主編雑誌『論語』に於いて再び「幽默」を呼びかけ、また一九三四年、林語堂は主編の『人間世』の創刊号に周作人の「五十自寿詩」(戯れ歌)を載せて、周作人の影響力を借りて、中国の文壇にヨーロッパの幽默を移植した。このように当時の中国の文壇に西洋の幽默文学を受け入れる条件がととのったので、本格的な「幽默」ブームが到来することになったのである。

この「幽默」ブームは小品文運動、明清の俗文学への回帰などの文学思潮の一つであって、当時の文壇に於いて、広汎な読者層に支えられており、文学史上軽視出来ない重要な課題である。

おわりに

以上述べてきたように、周作人の滑稽趣味は日本留学中、江戸の庶民文芸との出会いに始まる。そして中国の明清、ギリシアなどの滑稽文学との比較研究を通して発展し、後には彼の『語絲』編集、文学研究、作品などへ幅広く表われることになったのである。周作人は日本の滑稽文学作品を読み比べ、中国の滑稽文学に「滑稽の爲の滑稽」の内容が乏しいことに気付き、中国文学に不足する内容を補充して、林語堂達と一緒に中国文壇に「幽默」ブームを引き起こしたと言える。この「幽默」ブームは東洋の滑稽と西洋の幽默を折衷して、中国の滑稽文学を全面的に発展させた。周作人のこの滑稽提唱は「載道派」である道学、八股に束縛された腐朽な古文学への批判だけでなく、彼の新文学論の具体的な試みでもあった。

周作人は、中国文学の中に幽默の乏しいことを認識して、滑稽を提唱したわけだが、それは三十年代に一旦ブームを呼んだものの、ついに中国文学の重要な要素として定着することはなかった。最近の中国の文壇を見ると、文化大革命後の「傷痕文学」、「尋根文学」に続いて、王蒙、阿城、王朔らがまた中国文学の道は世俗文化に求める

べきだと呼びかけて、新しく幽默小品を多く出している。周作人の願いはようやく実現されようとしているのである。中国の現代「幽默大師」には魯迅、林語堂、老舍、錢鍾書の四人が挙げられるが、著者は周作人も五人目の「幽默大師」に数えられるにふさわしい人物であると思う。それが広く承認されるかどうかは最近の幽默小品が今後定着するか否かにかかっている。

註

- (1) 「苦茶庵笑話集」 (『周作人全集』二 藍燈文化事業股份有限公司 一九九二年六月)
- (2) 挿隊とは中国の文化大革命の間、都市部の知識青年が農村に行き、人民公社の生産隊に入り、労働に従事するとともに、貧農、下層中農に学び、また定着することである。本文では比喩として外国から来た「幽默」が中国の文化に定着していくことを表わす。
- (3) 「蘇格拉底潑辣的妻子」 『林語堂論中西文化』 萬平近編 上海社会科學出版社 一九八九年
- (4) 「洒落と滑稽」 『笑の研究』 (麻生磯次著 東京堂 昭和二十二年九月)を参照。
- (5) 『誹風柳多留』 四冊 (山澤英雄訂 岩波書店 一九九五年七月十七日 第一刷発行)
- (6) 『芭蕉俳句集』 (中村俊定校註 岩波書店 一九八八年五月十六日 第二十二刷発行)
- (7) 獨脚戲は民国初期に、上海付近で流行し始めた独り狂言のことで、人を笑わせ、楽しませることを目的とし、上海のみならず広く江南一帯で人気を博した曲技芸術の一つである。
- (8) 春柳社は清末に來日した留学生たちによって、一九〇六年に結成された新劇の劇団で、中心人物は東京美術学校に留学していた曾延年と李岸であった。春柳社のメンバーが上海に戻った後に、新劇を興す面で大いに活躍した。上海の滑稽文芸にも大きな影響を与えた。
- (9) 「八七、學日本語(續)」 『苦茶』周作人回想録 (敦煌文藝出版社) 一九九五年三月
- (10) 「日本の再認識」 『周作人全集』(五) (藍燈文化事業股份有限公司) 一九九二年六月

(11) 「八七、學日本語(續)」 『苦茶』周作人回想録 (敦煌文藝出版社) 一九九五年三月

「一八九、我的工作(六)」 『苦茶』周作人回想録 (敦煌文藝出版社) 一九九五年三月

(12) 「答伏園論『語絲的文体』」 『語絲』第五十四期 給孫伏園的信 一九二五年十一月二十三日

(13) 「滑稽似不多」 『語絲』第八期 給伯亮亮的信 一九二五年一月五日

(14) 「一九五、拾遺(己)」 『苦茶』周作人回想録 (敦煌文藝出版社) 一九九五年三月

(15) 「喜劇的価値」一九五八年七月六日 『知堂集外文』 四九以後 岳麓書社 陳子善編 一九八八年

(16) 黃花麥果は中國紹興地方の一種の自家製の食べ物であり、普通は墓参りの供物として使われている。材料は麦粉か米粉で、中に鼠曲草(二月に芽が出て黄色い花を咲く野草)をまぜて蒸してたべるものである。

(17) 周作人は一九二四年九月「故郷の野菜」にこの童謡を引用し、また一九五四年七月に書いた「兒歌中的喫食」(『周作人散文』(四) 中國廣播電視出版社 一九九二年四月)に同じくこの童謡を引用。

(18) 「苦茶庵笑話集」 『周作人全集』 三 (藍燈文化事業股份有限公司) 一九九二年六月

(19) 以下の「五十自壽詩」二首が林語堂主編の雑誌『人間世』の創刊号に載せられた。

其一

前世出家今在家 不將袍子換袈裟 前世は出家 今は在家 袍子をもつて袈裟に換へず

街頭終日聽談鬼 窗下通年學畫蛇 街頭に終日 鬼を談ずるを聴き 窗下に通年 蛇を画くを学ぶ

老來無端玩骨董 閑來隨分種胡麻 老來なりて端なくも骨董を遊び 閑來れば随分胡麻を種う

旁人若問其中意 且到寒齋喫苦茶 旁人若し其の中の意を問わば 且く寒齋に到りて苦茶を喫せよ

其二

半は儒家半釋家 光頭更不着袈裟 半は是れ儒家 半は釈家 光頭さらに袈裟を着けず

中年意趣窗前草 外道生涯洞里蛇 中年の意趣窗前の草 外道の生涯洞裏の蛇

徒羨低頭咬大蒜 未妨拍桌拾芝麻 徒に羨む頭を低れ大蒜を咬むを 未だ妨げず桌を拍ちて芝麻を拾うを

談狐說鬼尋常事 只欠工夫喫講茶 狐を談りて鬼を説くは尋常の事 ただ講茶を喫する工夫を欠く

周作人文学の滑稽趣味について(呉)

※ 本稿は今年の一九九六年五月十八日川内市で行なわれた九州中国学会大会での口頭発表を纏めたものである。周作人の原文は左の諸本を参照し、筆者の拙訳によって引用する。

『周作人全集』 五冊 (藍燈文化事業股份有限公司) 一九九二年六月

『周作人散文』 四冊 (中國廣播電視出版社) 一九九二年四月

『苦茶』周作人回想録 (敦煌文藝出版社) 一九九五年三月

『知堂集外文』四九年以後 (岳麓書社) 陳子善編 一九八八年

『周作人集外文』(一九〇四—一九二五)海南国際新聞出版中心 張鉄栄、陳子善編